

【研究ノート】

ライプニッツにおける共可能性と予定調和

Leibniz on Compossibility and Pre-established Harmony

枝村 祥平
Shohei Edamura

本論では、ライプニッツ哲学において、予定調和を前提としなくても被造物同士の間には必ず成り立つ関係、つまり共可能性に由来する関係と、予定調和そのものが区別されることを論じる (cf. Rescher 1979, p.66; Rutherford 1995, pp.187-91)。予定調和は、神の最善な意志によって実現される被造物同士の特殊な対応関係である。一方でライプニッツは被造物同士と一緒に創造されるにあたっては必ず一定の関係をもたなければならないと考えていた。そうすると、神の善意なしに被造物同士の一種の対応関係が成り立っているのであり、予定調和の意義はそれほど大きなものではないとさえ思われるかもしれない。しかし、この場合の対応関係は極めて抽象的で希薄なものに過ぎない。我々が通常理解するような、魂同士の表象の対応関係や、心身の対応関係は、予定調和を経て実現されるものなのである。

1. 共可能性

共可能性 (compossibilité) はライプニッツが使用した用語の中で比較的良好に知られたものの一つである。共可能性とは、複数の概念が無矛盾な形で結合されうる場合、あるいは複数の存在者がともに存在するという仮定が何ら不整合ではないような場合、それら概念や存在者がもつ性質を言う。

「共可能的なもの (compossibilia)」という語は、『24の命題』¹ (G7 289 1690年代?) と『事物の根本的起源 (De Rerum Origanatione Radicalii)』 (G7 304 1697年11月23日) にも見出されるが、1701-06年のテキストでは『人間知性新論』 (1703-5) の次の箇所を挙げなければならない。

関係は真理のように精神に依存する実在性を持ちますが、人間の精神に依存する実在性をもつわけではありません。というのも、それらの関係すべてを常

に決定している至高の知性的存在者が存在するからです。関係とは区別された混合様態は実在的な偶有性でありえます。しかしそれらが精神に依存するにしてもしないにしても、それらの観念の実在性のためにはこれら様態が可能であること、あるいは同じことですが、判明に知解できることで十分です。そしてそのためには、成分が共可能的である、言い換えれば共にありえなければなりません。² (G5 246 = NE 2.30.4)

この箇所では、個体ないし単純実体同士に限らず、共可能性が一般的に論じられているが、ライプニッツにおいては、個体ないし単純実体もまた、神によって完全な形で概念的に把握されていることに注意しなければならない。この場合、二つの個体ないし単純実体をともに矛盾なく把握することが可能かどうかという問題が起こってくる。そして、神が把握する二つの個体についての概念は互いに整合

¹ この『24の命題 (Die 24 Sätze)』という表題はハイデッガーによって命名されたものであり、ライプニッツ自身によるものではない。

² TH. [Les Relations ont une réalité dependante de l'Esprit comme les Verités; mais non pas de l'Esprit des hommes, puisqu'il y a une supreme intelligence qui les determine toutes de tout temps. Les Modes mixtes, qui sont distincts des relations, peuvent estre les accidens reels. Mais soit qu'ils dependent ou ne dependent point de l'esprit, il suffit pour la réalité de leur idées, que ces Modes soyent possibles ou, ce qui est la même chose, intelligibles distinctement. Et pour cet effect, il faut que les ingrediens soyent compossibles, c'est à dire qu'ils puissent consister ensemble.] (G5 246 = NE 2.30.4)

的でなければならず、この意味でやはり共可能的でなければならぬのである。

少しさかのぼってテキストを確認しておこう。ライプニッツは、『形而上学叙説』(1686)(G4 433, 436)やアルノー宛書簡(G2 52 1686年)において、神は個体の完足概念(notion complète)を認識し、ある個体に起こってくるすべてを知ることが出来ると述べた。そして、複数の個体が同一の世界で存在しうるためには、それらの個体の概念が整合的でなければならない、つまりは共可能的でなければならないと考えたのである。ミシェル・フィشانが述べているように、1690年代に入ると完足概念の語はほぼ使用されなくなってしまうが(Fichant 2004, pp.98-9 etc.)、諸々の個体ないし単純実体が互いに整合的でなければ同じ宇宙ないし世界に存在することは出来ないと考えられていることに変わりはないと考えられる。というのも、後にレモン宛書簡において、ある複数の被造物単純実体は、それらが共に存在することが整合的であるときにのみ共可能的であると明確に述べられているからである(G3 572-3 1714年12月; Rutherford 1995, p.182)。

では、複数の個体あるいは被造物単純実体が共に存在することが整合的でなくなってしまうのは、どのような場合だろうか。この問題に関し、学説の変遷があるので整理しておこう。

バートランド・ラッセルはいち早く、共可能性に関して興味深い指摘をしている。ラッセルは、二つのものが共可能であるという判断は分析的ではありえないとする(Russell 1937, p.18)。二つのもののうちいずれか一つを主語とし、そのものの性質を述語とする分析的な命題は、そのものが他方と両立可能であることを主張しえないと考えられているからである。ラッセルは、二つのものの両立可能性が関係を含み、一つのを主語とし関係を含まない命題では表現し得ないと考えたのである。そして、分析的な判断を基本的なものとしておきながら、共可能性という重要な事柄を個体を主語とする分析的な判断によって扱うことが出来ない点は、ライプニッツ哲学の弱点であると考えられている。

一方でラッセルは、共可能性を説明する独自の解釈を提案した。ラッセルによれば、すべての可能世界は、その世界において通用する一般的な法則をもつ(G2 40 etc.)。具体例は、この世界における物体の運動の法則である。そして、同一の一般法則の集合のもとに実現されえないような二つないしそれ以上の事物は、共可能的ではないのである(Russell 1937, p.66)。例えば、人物Aの表象に現われている物体の運動が $F = ma$ を遵守しているのに、人物Bの表象に現われている物体の運動は $F = 10ma$ という法則に従ってしまっているとする。この場合には、AとBとは

同じ法則のもとにあると言えず、共可能的ではないとされるのである。

ラッセルが法則に注目したのは、個体がかつ内的性質だけでは共可能性を説明できないと考えたからである。確かに、一つの個体における二つの性質は両立不可能でありえる。例えば、「Aは人間である」と「Aは犬である」という二つの命題は、人間の概念が理性的であるという内容を含み、犬が理性的でないという内容を含むとすれば両立不可能であろう。しかし、「Aは人間である」と「Bは犬である」は決してそうではない。AやBにどのような性質を帰そうとも、二つが両立不可能だということは説明出来ないように思える。このような事情を考慮してラッセルは、一般法則がなければ、任意の二つの可能的なものは互いに矛盾しえず両立可能となると考えたのである(Russell 1937, p.67)。

一方、ヤッコ・ヒンティッカや石黒ひでは、共可能性を関係の性質によって説明しようとした。ヒンティッカは、1972年の論文において、すべての可能的な個体が同時に存在することは、可能ではないとする。というのも、すべての可能的な個体が、共可能的であるわけではないからである(Hintikka 1972, p.189)。可能的なものとは、自分のうちに矛盾を含まないものである。一方共可能性は、同時に存在することが可能であるということに存する。

ヒンティッカは、可能性と共可能性を次のように区別する。Mが「～は可能である」を意味するとする。このとき、AとBがそれぞれ可能的であるという事態は、

$$M(\exists x)Ax \ \& \ M(\exists x)Bx$$

と表現される。一方、AとBとが共可能的であるという事態は、

$$M((\exists x)Ax \ \& \ (\exists x)Bx)$$

となるのである。ここでMが、矛盾を含まないということの意味とする(Hintikka 1972, p.190)。すると、 $(\exists x)Ax$ と $(\exists x)Bx$ がそれぞれ可能でありながら、 $((\exists x)Ax \ \& \ (\exists x)Bx)$ が不可能となるのは、AがBとの関係を含む、ないしBがAとの関係を含む場合のみである。結論としてヒンティッカによれば、一方が他方に対する関係的性質を含むのでなければ、二つの個体が両立不可能であることを説明出来ないと考えたのである。この場合例えば、ダビデがソロモンに対して父であり、かつソロモンがダビデに対して父であることは不可能であり、この場合の二つの個体は同じ世界に存在し得ないことになる。ヒンティッカの解釈はダゴスティエーノの1976年の論文でも支

持されている (D'Agostino 1976, pp.125-7 etc.)³。

続く石黒の1979年の論文をみてみよう。石黒は、完足的な個体が非関係的な述語の集合のみによっては構成されないと主張し、例えば、ダビデの父性は、個体としてのダビデについて真であるような性質であり、関係的であるとす (石黒 1979, pp.133-5)。そして、完足的な個体に必ず含まれる関係的性質こそが、二つの個体を両立不可能にさせるのだと考える (cf. 石黒 1990, pp.54-6 etc.)。

以上、共可能性を世界固有の法則設定により説明する解釈と、関係的述語によって説明する解釈をみた。これら二つの解釈はしかし、必ずしも矛盾するものではないと考えられる。グレゴリー・ブラウンの1987年の論文は、これら二つの総合を試みたものである (Brown 1987, pp.173-81 etc.)。ブラウンはここで、ラッセルが述べているように、個体の内的性質は他の個体の内的性質と矛盾することはないことを確認している。その意味で、複数の個体がともに存在することが矛盾を含むためにはそれら個体の関係に言及することが必要である。一方、ある可能世界において成立している法則の記述も実は、可能世界に属する複数の個体同士の関係を前提としているとされる。というのも、この場合の法則は、一個体がもつ表象の法則に留まることはなく、同一世界のすべての個体の表象が遵守しなければならない法則だからである。

そうすると、仮に法則設定により共可能性を説明するにしても、結局は個体のもつ関係的述語に触れざるをえないことになるだろう。事実、共可能性の説明に関して関係的述語を導入する説は今日でも広く支持されている (ex. Rutherford 1995, p.182; Cover and Hawthorne 1999, pp.131-41; Rescher 2003, pp.76-81)。関係的述語を導入する説から理解されることは、任意の可能世界において、そこに属する二つの個体は必ず互いに整合的な関係的性質をもたなければならない、ということである。

2. 実在的連関と表出

本節では、個体同士が必然的に表出 (exprimer) しあうと考えられていることを確認した上で、この表出の内容が一般的で抽象的なものに過ぎないことを論じる。前節では、例えば個体AとBが共可能的であるためには、AがBに対してもつ関係 (関係的述語) と、BがAに対してもつ関係が整合的でなければならないことを確認した。これを受けて、本節ではまず、AとBとが互いに整合的な関係的述語をもつことが、AとBとが表出しあうことを帰結することを確認する。ただこの場合の「表出」の関係は、心身の予定調和によって提示されたような特定された対応関係ではなく、極めて抽象的なものに留まると考えられる。

前提となる、「純粹に外的な規定 (denominatio pura extrinseca, denomination entière extérieure) はない」というテーゼを紹介しておこう。このテーゼからは、個体同士の関係は単に外的なものではなく、必ず各々の個体もつ内的性質に基づいたものであり、どの個体も他の個体もつある性質に対応した性質を必ずもっていることが帰結する。

テキストを確認しておく⁴。絶対的に外的な規定は与えられないという記述が『自然の驚くべき神秘の発見』(G7 311)に見られ、『実在的現象を想像的現象から区別する仕方について』(G7 321-2 1690年)⁵でも外的規定という語を使った同趣旨の記述がある (cf. G4 507 1698年)。

これを受け、デ・フォルダー宛書簡では「裸の (nuda) 外的規定」ないし「単に (sola) 外的な規定」がありえないとされている。

実際、それだけで把握されるものが場所の内に存在し得ないことは確かだと私は思います。というの

³ F.B.ダゴスティーノは、可能性と共可能性との区別がなくなってしまうと、スピノザ主義に至ってしまうとライブニッツが強く意識していたことを指摘する (D'Agostino 1976, p.126)。すべての可能的なものが存在し、可能的なものの系列がただ一つしかなければ、神は創造にあたり複数の選択肢をもたないことになってしまう。

このように共可能性を説明する必要性を強く意識した上で、ダゴスティーノは、共可能性に関する解釈を五つ (ベンソン・メイツ、ラッセル、ルイ・クーチュラ、ルドルフ・カルナップ、ヒンティッカ) 吟味した後、ヒンティッカの解釈をもっとも共可能性をよく説明できるものとして評価する。また、アルノー宛書簡での「個体的実体の概念はすべての変化と関係を、そして一般的に外的と呼ばれるような関係でさえ含む。」という記述も、ヒンティッカの解釈と整合的であるとされる (Hintikka 1972, p.191)。

⁴ なお外的規定の語は、早くも1666年のヤコブ・トマジウス宛書簡に見られる。そこでは色が物がもつ性質ではなく外的規定だとされている (G1 8)。1. Omnis color est impressio in sensorium, non qualitas quaedam rebus, sed extrinseca denominatio, seu ut Th. Hobbes appellat, phantasma. (G1 8)

⁵ Omnia autem existentia commercium habere inter se demonstratur tum ex eo, quod alioqui non potest dici utrum aliquid in ea contingat nunc an non, adeoque talis propositionis non daretur veritas aut falsitas, quod absurdum est, tum quia multae denominationes extrinsecae dantur, nec quisquam viduus fit in India uxore in Europa moriente, quin realis in eo contingat mutatio. (G7 321-2)

も、場所のうちに存在するという事は単に外的な規定ではないからです。それどころか、基本において内的な規定をもたないような外的な規定など全く与えられません。⁶ (G2 239-40 1702年4月)

また、場所において異なるもの同士は、自分の場所を、すなわち周囲を表出しなければならないし、従ってそれらは、単に場所においてのみあるいは単に外的な規定によってのみ区別されるのではありません。もっとも一般的にはそのように考えられてしまっているのですが。⁷ (G2 250 1703年6月20日)

『人間知性新論』(1703-05)にも次のような記述がある。

とはいえ、形而上学的な厳密さにおいては、すべての事物の實在的な結合によって、全く外的な規定(純粹二外的な規定)はないというのが真実です。⁸ (G5 211 = NE 2.25.5)

表現の違いはあるが、これらはすべて純粹に外的な規定を排除する趣旨である。より具体的にみてみよう。ライプニッツは、妻をヨーロッパに残してインドに赴き亡くなった男がいるとすると、その男の死去は必ず妻の外的規定だけではなく内的な規定をも変化させると言っている(G7 321-2)。ここで外的規定とは、妻が夫に対する関係のことである。男の生前は、妻は男と配偶者の関係にある。ところが、男が亡くなった場合には、いわゆる未亡人になる。「配偶者」と「未亡人」といった語はある人物の他の人物に対する関係を表している。ライプニッツは、男の死亡という出来事は、単に妻の外的規定あるいは関係的性質を変化させるだけに留まらない、と考えているのである。遠く離れていても、その男に起こった出来事には、必ずそれに対応した妻の内的状態の変化(つまり表象の変化)が存在すると考えられているのである。そうすると、どの単純実体にも、他のすべての単純実体の変化に対応した変化が起こるといことになるだろう。

それでは、以上のようにある単純実体が他の単純実体の変化を自らのうちに反映させるといいう事態は、あら

ゆる可能世界において保持されているのだろうか。次の1687年4月30日のアルノー宛書簡の記述は、ライプニッツがそのように考えていたことを示唆する(cf. G6 107; Rescher 1979, p.66; Rutherford 1995, pp.185-8)。

神は、諸実体が互いにすべてを表出するようにさせる、実体のこの一般的概念によって、實在的連関を存在させるようにしたのである、とすることが出来ます。⁹ (G2 95-6)

ここでは、実体の一般概念による實在的結合の結果として、実体相互が完全に表出しあうことになることとされている。この「実体の一般概念」は、個体的実体の完足的概念に相当するものである。アルノー宛書簡において、現実世界のアダムのみならず、それと共通点をもった無数の可能なアダムの概念が考えうるとされている(G2 42 cf. G6 107)。従って、現実世界の個体の概念だけではなく、他の可能世界に属するものとして考えられている個体の概念もまた、神によって認識されていると考えなくてはならない。ここで、可能世界の実体に対応した完全概念が、可能世界に所属するとされるすべての実体相互の「實在的連関(une connexion réelle)」を必然的にもたらし、それら実体が完全に表出しあうようにさせるのだとすれば、あらゆる可能世界の個体の間にはこの「表出」の関係がなりたっていることになるだろう。そして、『人間知性新論』(1703-5)でも「すべての事物の實在的結合」(G5 211 = NE 2.25.5)により純粹に外的な規定は存在しないことになることと明確に述べられている。そうすると、ライプニッツは1700年代以降でも同様の見解を持っていたようにも思える。

しかし一方、「表出」の定義をみると、それが極めて一般的で抽象的なものに過ぎないことがわかる。明確な定義があるのはアルノー宛書簡のみである。

(私の言葉では)一方について言いうることと他方について言いうることの間に恒常的で規則的な関係があるとき、一つの事物は他の事物を表出することになります。こうして、遠近法の投影図は実測図を

⁶ Certum etiam puto, quod se solo concipitur, in loco esse non posse. Nam in loco esse non est nuda extrinseca denominatio: imo nulla datur denominatio adeo extrinseca ut non habeat intrinsecam pro fundamento,... (G2 239-40)

⁷ Etiam quae loco differunt, oportet locum suum, id est ambientia exprimere, atque adeo non tantum loco seu sola extrinseca denominatione distingui, ut vulgo talia concipiunt. (G2 250)

⁸ Quoique dans la rigueur metaphysique il soit vray, qu'il n'y a point de denomination entierement exterieure (denominatio pure extrinseca) à cause de la connexion réelle de toutes choses. (G5 211 NE 2.25.5)

⁹ On peut dire que Dieu fait qu'il y a une connexion réelle en vertu de cette notion generale des substances, qui porte qu'elles s'entreexpriment parfaitement toutes,... (G2 95-6)

表出することになります。¹⁰ (G2 112 1687年10月9日)

このよく知られた「表出」の定義は明らかに、それ自体としては一般的に過ぎ、内容の薄いものといわざるを得ない。規則的で恒常的な対応関係は、多くのものに見出すことが可能である。初項1公差1の等差数列（自然数の数列） A_n は、初項2公差2の等差数列（偶数の数列） B_n と、 $2A_n = B_n$ という規則的な関係にあり、初項2公比2の等比数列 C_n とは $2^{A_n} = C_n$ という関係を持ち、項が $D_n = n!/2$ で表現される数列とは、 $(A_n)! / 2 = D_n$ という関係にある。このように、任意の二つの規則的な数列の間には、規則的な対応関係を見出すことが可能であるように思える。そして、ライプニッツは、単純実体の表象を生み出す原始的力を、数列の法則になぞらえている (G2 262 1704年1月21日)。単純実体のもつ表象は上に挙げた数列などとは比較にならないほど複雑とはいえ、原始的力によって統括されたある法則性をもっていると考えられることのできるだろう。そうすると、任意の二つの単純実体について、それらによって生み出された表象の系列の間に対応関係を設定することが出来るようにすら思えてくる。

ここで問題となるのは、常識的に考えて両立しないように思える二つの単純実体が、互いに「表出」しあうというかどうか、である。例えば、次のように考えてみよう。まず、現実世界と同じように、ポンペイウスと呼ばれるものに勝利したかのような表象をもつカエサル（厳密にはカエサルと呼ばれる者の魂ないし精神）を考えてみる。そして一方で、カエサルと呼ばれるものに勝利したかのような表象をもつ、現実世界と明らかに異なるポンペイウスの魂（ポンペイウスの名で呼ばれるが、現実世界の個体「ポンペイウス」とは明らかに異なる）を考えてみよう。これらがともに存在し、互いに表出しあうことは可能だろうか。上に挙げた「表出」の定義からは、これらが表出しあう可能性を排除する決定的理由を導くことができないように思われる。というのも、互いに矛盾するようにすら思える表象をもつ両者の間にすら、何らかの形で恒常的で規則的な対応関係を設定することが出来るかもしれないからである。

一方で、ライプニッツが考えていた表出の関係とはこのような希薄なものではないので、これらの間に「表出」は

成り立ちえないとの印象を受けるかもしれない。確かに、ライプニッツが「表出」という語によって念頭においていたのは、現実世界におけるような予定調和を介した緊密な関係であり、この観点からすれば「表出」の概念を広く考えすぎるとはライプニッツの真意から離れてしまうように思われるかもしれない。

しかし、少なくともこの場合の「カエサル」と「ポンペイウス」が実は共可能的であるというのがライプニッツの見解であったと考えられる。1690年代のテキストになるが、次の箇所をみてみよう。

神は各々の実体に他の諸実体をもつ諸現象から独立した現象を与えることが出来る。しかしこのようなやり方では、いわば、神は諸実体と同じ数だけの連関のない諸々の世界を作ってしまうことになるだろう。夢を見ているときに、別の自分の世界にいて、目覚めたときに共通の世界に戻るといわれるが、ほとんどそれと同じ様なものである。¹¹ (G4 519)

ここでライプニッツは、仮に神が意志すれば我々の通常の理解では到底対応しあうとはいえないような現象を諸々の実体にみせることが出来ることと述べているのである。そうすると例えば、神は、ポンペイウスと呼ばれるものに勝利したかのような内的現象をもつカエサルと、カエサルと呼ばれるものに勝利したかのような内的現象をもつポンペイウスを同時に創造することが可能になるだろう。

もちろん、仮にこれら二つの単純実体が共可能的であるとしても、この場合のカエサルと呼ばれる者は厳密には現実世界のカエサルと同一ではないと言うこともできる。というのも、この場合のカエサルと呼ばれる者は、ポンペイウスに対して真に勝利したということができず（ポンペイウスと呼ばれる者もまた勝利の経験を味わっているのだから）、「ポンペイウスに勝利する」という関係的述語を彼に帰することは出来ないからである。しかしともあれ、仮にこれら二つの単純実体は何らかの仕方ですら「表出」しあうのであれば、「実在的連関」によって要請される「表出」の関係は我々の感覚から見れば極めて希薄なものといわざるをえないだろう。また、仮にこのような関係が「表出」の関係とは言えないとしても、少なくとも共可能性によってもたらされる個体同士の関係は希薄なものに過ぎないと結

¹⁰ Une chose exprime une autre (dans mon langage) lorsqu'il y a un rapport constant et réglé entre ce qui se peut dire de l'une et de l'autre. C'est ainsi qu'une projection de perspective exprime son geometral. (G2 112)

¹¹ Dieu pouvoit donner à chaque substance ses phenomenes independans de ceux des autres, mais de cette maniere il auroit fait, pour ainsi dire, autant de mondes sans connexion, qu'il y a de substances; à peu près comme on dit, que quand on songe, on est dans son monde à part, et qu'on entre dans le monde commun quand on s'éveille. (G4 519)

論付けることができるだろう。

3. 空間

本節では共可能的な単純実体同士の秩序としての「空間」を考察し、この秩序がやはり「表出」の関係と同様に極めて一般的で抽象的なものに過ぎないことを確認する。

ライプニッツはいくつかの箇所では空間を、「可能的なものが同時に存在することの秩序」と定義している (G2 269 1704年6月30日 etc.)。

確かに、空間は可能的なものが同時に存在することの秩序に他ならず、時間は可能的なものが継起的に存在することの秩序です。そして、物理的物体が空間に対する関係は、諸事物の状態あるいは系列が時間に対する関係と同じです。物体と諸事物の系列とが、空間と時間に対して、運動あるいは能動と受動、[そして] その原理を付け加えるのです。¹² (G2 269 1704年6月30日)

とすれば、この文脈における「空間」は、共に存在する事物の間に必ず見出される関係であると思える。そして、あらゆる可能世界の個体は、創造されれば共に現実存在すると考えられている以上、あらゆる個体は同一世界の他の個体とともにこの「空間」の秩序に位置づけられると思われるのである。

それでは単純実体が「空間」の秩序を保持するとき、各々の単純実体の表象はどのような性質を維持するのだろうか。それらは、サッカースタジアムでシュートを打つ選手を見つめる多くの観客のように、類似した出来事を三次元空間のうちに秩序づけられた内的現象としてもつことになるのだろうか (cf. Rutherford 1995, pp.189-91)。残念な

がら、このようなことをあらゆる可能世界において見出される単純実体同士の関係として主張することは難しいように思える。というのもライプニッツは、我々がよく知っている空間とは違った空間がありえることを示唆しているように思われるからである。

もし空間において空虚があれば (例えば球が中空なら)、空虚の大きさを決定することは出来るでしょう。しかし、もし時間において空虚があれば、つまり変化を欠いた持続があれば、空虚の長さを決定することは不可能でしょう。そこから、その間に空虚がある二つの物体が接すると言う人を論駁することが出来ることになります。というのも、中空の球の二つの対極は接しえないからです。幾何学がそうした接触を禁じています。しかし、一方が他方の後に存在し、一方は他方が終わったときに何らの間隔もありえない仕方では必然的に始まる二つの世界が、持続に関して接すると言う人に論駁することは出来ないでしょう。この間隔は決定不能なので、これに論駁することは出来ないのです。もし空間が一本の線でしかないならば、そしてもし物体が不動ならば、二つの物体の間の空虚の長さを決定することも不可能でしょう。¹³ (G5 142 = NE 2.15.11)

ここでは、空間が一本の線でしかないという仮定がなされておられ、空間は時間軸と同じ次元となる。このとき、二つの物体の間の空虚の長さがなぜ決定されえないのかは難しい問題であるが、次のように考えることは出来ないだろうか。空間が次元の場合、二つの物体の形状は二つの線分とみなすことができるだろう¹⁴。そして、二つの物体の間に空虚があるという事態は、例えば、線分AはBより左側にあり、Aの右端とBの左端とが離れているという

¹² Nempe *spatium* nihil aliud est quam ordo existendi simul possibilitium, uti *tempus* est ordo existendi successive possibilitium. Et ut corpus physicum se habet ad spatium, ita status seu rerum series se habet ad tempus. Et corpus ac series rerum spatio et tempori addunt motum seu actionem et passionem, ejusque principium. (G2 269)

¹³ ...; c'est que s'il y avoit un vuide dans l'espace (comme par exemple si une sphere estoit vuide au dedans), on en pourroit determiner la grandeur; mais s'il y avoit dans le temps un vuide, c'est à dire une durée sans changemens, il seroit impossible d'en determiner la longueur. D'où vient, qu'on peut refuter celuy qui diroit que deux corps, entre lesquels il y a du vuide, se touchent; car deux Poles opposés d'une sphere vuide ne se sauroient toucher, la Geometrie le defend: mais on ne pourroit point refuter celuy qui diroit que deux mondes dont l'un est apres l'autre se touchent quant à la durée, en sorte que l'un commence necessairement quand l'autre finit, sans qu'il y puisse avoir d'intervalle. On ne pourroit point le refuter, dis-je, parceque cet intervalle est indeterminable. Si l'espace n'estoit qu'une ligne, et si le corps estoit immobile, il ne seroit point possible non plus de determiner la longueur du vuide entre deux corps. (G5 142 = NE 2.15.11)

¹⁴ もっとも、現象としての物体が不連続であるという第一部の議論を考慮すれば、厳密には物体は線分と同じではない。連続体としての線分に関しては左端から右端までのどの点を取ってもそれが線分上の点であると言うことができる。しかし、物体の左端から右端までのどの点をとっても、そこに対応した物体が存在するとは限らない。この場合の点は、物体の部分同士の境界であって、そこには何らの物体も存在しないことがありうるのである。

場合として考えることができるだろう。この場合に、Aの右端とBの左端との間の距離を測るには、この距離と何らかの他のものとを比較する必要がある。例えば、Aを右側にずらし、Aの右端とBの左端が接するときに、以前Aの右端があった場所にAの左端が位置づけられるのであれば、間の距離はAの長さと同じだということになるだろう。ところが、AやBを動かすことができないならば、そもそもこのような比較をすることができないのである。

ともあれ、ライブニッツは、一次元空間を可能なものとして考えていたように思われる。そうすると、一次元空間を内的現象の秩序としてもつ単純実体も不可能ではないように思われるし、我々がよく知っている三次元空間をあらゆる可能世界において単純実体に与えられる内的現象が保持する秩序であると考えざるを得ないことになるだろう。以上により本論は、この現実世界においてある表象主体に与えられた内的現象の秩序としての空間は、すべての可能世界において保持されなければならない程普遍的なものではないと解釈する。

4. 共可能性と対比した際の予定調和の意義

以上の議論から理解されるのは、共可能性に由来する単純実体同士の関係は、極めて抽象的なものであり、心身の予定調和のような充実した内容をもった単純実体同士の対応関係は神の意志決定を経なければ実現されないということである。

あらゆる可能世界がみださなければならぬような、いわば可能世界の必要条件については、残念ながら、ライブニッツ自身の記述からは極めて抽象的な議論しか読み取ることが出来ない。おそらく3節で述べたように、我々の精神に与えられた内的現象が保持している空間の秩序ですら、神の意志による選択がなければ我々に与えられなかったことであろう (cf. Rescher 1979, p.85)。

それでは、単純実体同士の予定調和はとりわけ、単なる共可能性によって実現される対応関係に何を付け加えるのだろうか。まず、可能世界によっては、表象にあらわれてくる現象としての物体のうちあるものは、何ら単純実体と対応関係を持たないものでありうる、ということが出来る。というのも、ライブニッツは、神がいくつかの単純実体を創造しないままに他の単純実体を創造することも出来

たことを示唆しているからである (cf. G2 516, G7 320-2, etc. Rutherford 1995, p.187)。とするならば、例えばある可能世界においては、ある表象主体に与えられた現象としての椅子は多くの単純実体と対応関係をもつが、同時にその表象主体に与えられている現象としての机は、単なる現象に過ぎず、それに対応した単純実体は何ら存在しないということがありうることになる。これに対して、心身の予定調和は、表象主体とその身体に存する多くの他の単純実体との対応関係だけではなく、表象主体に与えられたすべての現象が他の単純実体と対応関係をもつことさえも保証するのである。

さらに、心身の予定調和は、すべての現象について対応関係を保証するだけではなく、ある明確な仕方での対応関係を保証するものである。つまり、3.1で確認したように、心身の予定調和は現象としての有機的身体と単純実体との対応関係を保証するのである。心身の予定調和を前提とすれば、現象としての机も椅子もともに、有機的身体ではないにせよ有機的身体が集まったものであり、これらの現象としての有機的身体の各々は単純実体との対応関係をもっているということが出来る (Rutherford 1995, p.227)¹⁵。このような形での現象と単純実体との対応関係は、神の意志選択を経ることなしには実現されないままなのである。

5. 先行学説の検討

— レッシャー、メイツ、ラザフォード —

最後に、共可能性に由来する単純実体同士の必然的な対応関係と心身の予定調和との関係についての学説を検討しておこう。ニコラス・レッシャーは早い時期に、共可能性に由来する個体同士の対応関係と、予定調和に由来する個体同士の対応関係を明確に区別しようとした。彼の解釈が明快に読み取れる重要な箇所を訳出しよう。

現実世界において、構成員の間で合致と対応の完全なネットワークが認められるという事実は、必然的な結果ではない。その事実はこの世界の完全性のあり方を表現するのであり、すべての可能世界の不可避的な特質ではないのである。予定調和が現実世界を構成する諸実体を支配するということは、偶然的真理—「完全性の原理」によって得られる真理—で

¹⁵ ラザフォードは予定調和の特質を考えるにあたり、完全に堅固であって物理的に分割できないアトムとして自分自身を表出する単純実体の世界を例に挙げる。この世界はラザフォードによれば可能である。しかし、このアトムは、我々が住む最善秩序の世界における有機的身体とは明らかに異なっている。つまり、最善秩序が成立する世界の有機的身体の諸部分には、それに対応した従属的モナドが存在するが、ここで語られているアトムの部分には、それに対応した単純実体が存在しないのである (Rutherford 1995, p.228)。

ある。¹⁶ (Rescher 1979, p.66)

つまりレッシャーは、予定調和の実現が、偶然的真理であり、神がより高い完全性を実現しようとして意志を働かせた結果であると主張しているのである。ここで述べられている「合致と対応のネットワーク」は、予定調和に依存する特殊で完全性の高いネットワークである。

しかし一方で、レッシャーは予定調和が実現されない可能世界において、個体同士の相互関係が見出されることを否定せず、いずれの可能世界においても見出される、個体同士の関係を強調する。

ライプニッツを理解するにあたって、共可能性——概念的的一致に関して問題となる純粋に論理的な類の相互連関と適合——と、固有の調和、秩序だったシステムにおける相互調整とを区別することが大切である。この現実世界における諸実体の相互共可能性、そして/あるいは (and/or) 任意の他の可能世界における相互共可能性は、形而上学的に必然的な特質である。最低限の意味での相互の両立可能性、この純粋に論理的な世界の相互の一致は、論理的に不可避である。しかし諸実体が、単に論理的な共可能性をはるかに超える形で、入り組んだ仕方で調整されたシステムを、真のコスモス(単純で、一般的で、普遍的な物理学的・心理学的秩序の諸法則によって統御された世界)を形成し、互いに調和するという事実は、それとはまったく違う。そして、この特質こそが、「最善可能世界」のしるしとしての役目を果たす。論理的共可能性といわゆる調和とは全く異なった事柄である。前者はすべての世界の必然的な性質であり、後者は実在する世界の偶然的性質である。¹⁷ (Rescher 1979, p.66)

それでは、レッシャーがここで述べている形而上学的に

必然的な相互共可能性はどのような内容をもつのだろうか。ここでレッシャーが共可能性と関連づけて考えている、重要なテーゼを挙げなければならない。レッシャーは、どの可能世界においても、いかなる実体をも付け加えることはできないとする。新たに付け加えようとしても、その実体は付け加えられる先の可能世界と両立可能ではないというのである (Rescher 1979, p.49)。なぜそのようなことが主張されうるのだろうか。レッシャーによれば、どの可能世界のどの実体も、それを特徴づける完足的な個体概念をもつ。そして、その完足的な個体概念はその実体を、同一可能世界の他のすべての実体との関係を含む (Rescher 1979, p.49)。結果として、おのおのの可能世界において、そこに属する実体すべての間の概念的な連結があるということになる。この議論にしたがって、レッシャーは「一実体一世界説 (one-substance, one-world doctrine)」を導く (Rescher 1979, p.50)。いかなる実体も自分が属する世界から離れて別の可能世界へと移転されることはない。また、いかなる(可能的なものも含めた)実体も、二つの可能世界両方に属することはない。さらにまた、いかなる実体も、どの他の可能世界の構成員とも両立はできない。

レッシャーの解釈を踏まえ、ベンソン・メイツもほぼ同様の見解に立つ。メイツは、おのおのの個体概念は、その個体が属する宇宙におけるすべての他の個体概念を「鏡映する」あるいは「表出する」としている (Mates 1986, p.76)。そしてメイツは、この「表出」の関係から、ある可能世界における個体は、その世界に属するすべての個体が存在しない限りは存在しえないことになるというのである (Mates 1986, p.77)。

しかし、個体は同一世界の他の個体を必然的に表出せざるをえないのであり、その結果として一つの個体は一つの世界にしか属することが出来ないというレッシャーとメイツの主張は、慎重な検討を要する。というのも、ライプニッツは、神は現実世界における単純実体のうち、あるものを創造し、他のものを創造せずにおくことができたことを

¹⁶ The fact that the actual world is such that a thoroughgoing network of agreement and accord obtains among its constituents is not a necessary result. It represents a mode of perfection of this world, not an inevitable feature of every possible world. It is a contingent truth—one that obtains by virtue of the Principle of Perfection—that a Pre-Established Harmony reigns among the constituent substances of the actual world. (Rescher 1979, p.66)

¹⁷ It is important for an understanding of Leibniz to distinguish between *compossibility*—mutual linkage and accommodation of the purely logical sort at issue with conceptual consonance—and harmony proper, mutual attunement within an orderly system. The mutual compossibility of the substances within this actual world, and/or of those within any other possible one, is a metaphysically necessary feature. This purely logical mutual accord of world-coordinate substances in the minimal sense of mutual compossibility is logically inevitable. But the fact that substances harmonize with one another in a manner far beyond mere logical compatibility to make for an intricately articulated system, a genuine *cosmos* (a world governed by simple, general, and universal laws of physical and psychological order) is something quite different. And it is this feature which serves to mark this as “the best possible world.” Logical compossibility and nomic harmony are very different matters, the former a necessary feature of every world, the latter a contingent feature of the real one. (Rescher 1979, p.66)

示唆しているからである (cf. G2 516, G7 320-2 etc. Rutherford 1995, p.187)。そうすると、例えば、カエサル (正確にはカエサルの魂ないし精神) を創造せず、他のすべての個体 (アダム、イヴ、カイン、アベル、ノア、ポンペイウス etc.) を創造することも出来たと考えられる。この場合、カエサルなしの個体が形成する世界は、この現実世界とは異なった可能世界である。そうすると、ポンペイウスなどは、この現実世界のみならず、他の可能世界にも属することが出来たということになる。

もっともこの場合、カエサルを欠いた世界のポンペイウスは厳密には現実世界のポンペイウスと同一の個体ではない、ともいえる。というのも、カエサルを欠いた世界のポンペイウスは、現実世界のポンペイウスと全く同じ表象内容をもって一生を送る (ローマと言われる国において武将となる、カエサルと呼ばれる者—この場合のカエサルは一人の人物ではなく現象に過ぎないので—によって敗戦を被る、など) が、カエサルという個体ないし単純実体に対する関係的述語を欠いており、内的性質において現実世界のポンペイウスと同一ではあるが関係的述語においてはそうではないからである。個体の完足概念が、関係的述語をも含んだものであるならば、これら二つのポンペイウスと呼ばれる個体は互いに異なった個体概念をもち、厳密には同一ではないといってもいいだろう。

一方ドナルド・ラザフォードは、レッシャーやメイツが意識していた必然的に成立する個体同士の関係と予定調和との間の区別を引き継ぐが¹⁸、彼らの説に修正を加えている。ラザフォードは、個体的実体の概念が自分が属する世界の他の実体を表出するとライプニッツが明言することはまれであり、ある個体は他の個体がともに現実存在しなければ現実存在し得ないというレッシャーやメイツの立場は強すぎるというのである (Rutherford 1995, p.186)。

では、ラザフォードがとる「より弱い立場」とは何か。ラザフォードは、レッシャーの「一実体一世界説 (one-substance, one-world doctrine)」と自分の普遍的表出説 (doctrine of universal expression) とを対比させる。この説に従えば、アダムはカインなしに、あるいは彼の子孫なしに現実存在することが可能である (Rutherford 1995, p.187)。そして、ただ次の点のみが強調される。つまり、一群の実体は、宇宙の表出に関して適切な一致がないのであれば、同じ世界に存在するものとして (神によってさえ) 認識されることができないという点である。それゆえ、次のようなことになる。すなわち、自分をカインの父として表出するアダムと、自分をノアの息子として表出

するカインを考えることはできるが、これら二つの実体が同一世界の住人であると考えすることは不可能なのである。

共可能性もまた、普遍的表出説に従って改めて定式化される。つまり、複数の実体は、同一世界に共存していると認識されるときにのみ、すなわち、宇宙の表出に関して一致するときのみ、共可能的である (Rutherford 1995, p.187)。複数のモナドは、適切に関係づけられているとき、そのときに限って、一つの世界で共可能的である、あるいはともに実現されうる (Rutherford 1995, p.188)。そのような適切な連関は、複数のモナドが共通の時空枠組みと因果枠組みのうちで関係をもっているときと認識されうる場合に存在する。つまり、そこに属するあらゆるモナドのあらゆる状態が時空的にそして因果的に、同じグループの他のモナドとの関係で秩序づけられている場合である。以上を踏まえラザフォードは、すべての可能世界が共通の根源的な秩序をもっていると強調し、その秩序とは時間空間の秩序と因果の秩序だと考える (Rutherford 1995, pp.189-91)。モナドによる宇宙の表出は、つまり自分自身を世界における他の事物との関係で時空的な位置をもつものとして表出することに他ならず (Rutherford 1995, p.192)、モナド同士が時空的な位置を保持することが、すべての可能世界の必然的特質だと結論付けられる (Rutherford 1995, p.197)。

レッシャーとメイツの「一実体一世界」説の狭隘さを指摘し、神が現実世界におけるいくつかの個体を創造せずにおいた可能性を指摘した点において、ラザフォードの説は説得的である。ラザフォードが指摘するように、アダムを創造しなくても、神は現実世界とまったく同様の内的状態としての表象をもつカインやアベルなどを創造することは可能である。そして、アダムを欠いた世界が、これらの「カイン」や「アベル」を構成員とする現実世界とは別の可能世界を形成することができるのである。

結び

神の最善意志に由来する心身の予定調和は、単に表象主体と身体との対応関係をもたらしものではなく、表象主体とあらゆる他の単純実体との対応関係を保証するものである。この予定調和の理論によって、物体を単に内的現象としてではなく、より存在論的身分の高いもの、つまり単純実体の集合体として考えることが可能になる。確かに、我々にまず与えられているものは、内的現象であって他の単純実体ではない。認識論的に考えれば、足がかりと

¹⁸ なおラザフォードはカリフォルニア大学バークレー校でメイツを指導教員とし、博士号を取得している。メイツの著書では当時学生だったラザフォードへの感謝がさげられている (Mates 1986, p. iv)。

なるものは感覚に与えられ意識された内的現象であることは否定できない。しかし、我々が通常物体を考えると、あるいはより具体的に机や椅子などについて考えると、瞬間ごとに変化し一瞬間のみにおいて存在するものではなく、何時間、何日、あるいは何年といった期間持続するものとして考えるのではないだろうか。確かに、静止しているように見える机でさえ、実は細かい位置変化をし内部運

動をもっているものであり、その点において同一性に疑問をなげかけることができるかもしれない。それでも、異なった時点での内的現象としての物体を比較した場合に、活力のように保存されるものを見出すことが可能である。この活力は、物体が実際に持続するものであることを我々に示唆するである¹⁹。

【略号】

G = *Die philosophischen Schriften von G. W. Leibniz*. Ed. C. I. Gerhardt.
 Berlin : Weidmann, 1875-1890. Reprint, Hildesheim : Georg Olms, 1978.
 Cited by volume and page.
 NE. = *Nouveaux Essais* Cited by book, chapter, and section.

【文献】

- Brown, Gregory. 1987. "Compossibility, Harmony and Perfection in Leibniz" *Philosophical Review* vol.96 (2) : pp.173-203.
 Cover, Jan A. and John O-Leary Hawthorne. 1999. *Substance and Individuation in Leibniz*. New York : Cambridge University Press.
 D'Agostino, F.B. 1976. "Leibniz on Compossibility and Relational Predicates" *The Philosophical Quarterly* vol.26 no.103, pp.125-38.
 Fichant, Michael. 2004. "Introduction : L'invention Métaphysique" In Fichant ed. 2004. *Discours de métaphysique suivi de Monadologie*. Gallimard. pp.7-140.
 Frankfurt, Henry G. ed. 1972. *Leibniz : A Collection of Critical Essays*. Garden City NY : Anchor Books.
 Hintikka, Jarmo. 1972. "Leibniz on Plenitude, Relations, and the 'Reign of Law'" In Frankfurt ed. *Leibniz : A Collection of Critical Essays*.
 Ishiguro, Hidé. 1979. "Substances and Individual Notions" In E. Sosa ed. 1979. *The Philosophy of Nicholas Rescher : Discussion and Replies*. Dordrecht : Reidel, pp. 125-37.
 Mates, Benson. 1986. *The Philosophy of Leibniz : Metaphysics and Language*. New York : Oxford University Press.
 Rescher, Nicholas. 1979. *An Introduction to his Philosophy*. Basil Blackwell.
 _____. 2003. *On Leibniz*. Pittsburgh : University of Pittsburgh Press.
 Russell, Bertrand. *A Critical Exposition of the Philosophy of Leibniz*. 1937. 2nd ed. London : Allen and Unwin.
 Rutherford, Donald. 1995. *Leibniz and the Rational Order of Nature*. New York : Cambridge University Press.

[金沢星稜大学, 教養教育部准教授]

¹⁹ 本論は2008年に京都大学文学研究科に提出された博士論文に収録しきれなかった論考である。